

Comparison of “Tess of the d’Urbervilles” and “Jude the Obscure”

Kenichi TSUJI†

Abstract

There are many differences between “Tess of the d’Urbervilles” and “Jude the Obscure”. We can easily notice a difference in the atmosphere of the two stories. There are many descriptions full of joy in “Tess of the d’Urbervilles”. On the other hand, in “Jude the Obscure”, a gloomy atmosphere prevails throughout the story. However, we can also find some similarities between “Tess of the d’Urbervilles” and “Jude the Obscure”. For example, in both novels, trouble between the individual’s pursuit of happiness and the regularity of their community is a big theme. In fact, many critics of Hardy have referred to similarities and differences between the two works. This paper will review the similarities and differences in various respects, such as employing corpus data to support an analysis of these two novels. By doing this, I will try to objectively show the characteristics of both novels.

Keywords

main female character, main male character, comparison, corpus data

『ダーバヴィル家のテス』と『日陰者ジュード』の比較

辻 建一†

キーワード

女性主人公, 男性主人公, 比較, コーパスデータ

1. 『ダーバヴィル家のテス』と『日陰者ジュード』の類似点

『ダーバヴィル家のテス』と『日陰者ジュード』はそのストーリー展開において、ほぼシンメトリカルと言っても過言ではないほどの、共通性を有している。『ダーバヴィル家のテス』においてヒロインは最初、強い肉欲をもった男

に騙される。その男と別れたあと、彼女は崇高な理想を追い求める男と出会って愛を追求することになるが、結局は若くして悲劇的な死を迎える。『日陰者ジュード』では、ジュードは官能的な女の罠にかかって結婚してしまうが、その女と別れたあとスピリチュアルな女性と出会い愛を追求する。しかしやはり、最後には惨

† tuji@seiryu.ac.jp (Kanazawa Seiryu University, Liberal Arts and Sciences)

めに死んでしまう。二つの小説にこのような機械的なストーリーの対称性を見出すことができる点については、既に色々な批評家によって指摘がなされてきた。例えば福岡忠雄は、「エンジェルがテスに、実はロンドンで大学生と同棲していたことを告白、スーもまたジュードにかつてロンドンで大学生と同棲していたことを告白、一方告白を聞かされたテスにもジュードにもそのとき既に、結婚の障害となるのっぴきならない事情があったということ⁽¹⁾。」といったような、より細部の類似点もいくつか指摘している。

類似点はキャラクター設定にも見られる。テスはジュードに対応し、アレクはアラベラに対応しており、テスとジュード、アレクとアラベラはそれぞれ性格における興味深い共通項を見出せる。

まずテスとジュードに関していえば、他の生物に対して示す同情の大きさに、その優しい性格が同じように現れている。テスが傷ついたキジの首をひねって殺し、苦しみから解放してあげたように、ジュードも罨にかかって苦しむウサギを、可愛そうに思って死なせてあげる。テスは自ら「昔のあたしは、とても蠅一匹、虫けら一匹だって殺せなかったし、籠の中の小鳥を見てもしょっちゅう泣けてしまったものなのよ⁽²⁾。」と言うが、ジュードもミミズすら踏んで殺したりしないように気をつけて歩くなど、他の生物に対する異常なまでの気遣いを示している。

エンジェルとスーの重要な共通項は、二人ともキリスト教の因習的な側面に懐疑的な姿勢をとり、異教的な価値観に憧れを抱いていること、さらに両方とも性的には潔癖で、その愛の追求の仕方がシェリー風だと示唆されていることなどが挙げられる。そして彼らの恋愛の失敗の原因の共通点は、両方とも極端に理想主義的な愛を追求しようとしていることである。

表面的なストーリー展開の類似性やキャラク

ターにみられる共通性だけではなく、小説の提起している問題点でも一致する部分が見られる。例えば悲劇に至った原因の説明について、テスのアレク殺害もジュードの結婚の失敗も、血筋と関連づけられて説明されていることは重要な意味をもつ。ダーバヴィル家は暴力的振る舞いをしてしまう家系であるということ、フォーレイ家は結婚がうまくいかない家系であるということが、それぞれの小説で何度か示唆される。テスが殺人を犯したことはダーバヴィル家の血筋と関連づけられており、ジュードの結婚の悲惨な失敗はフォーレイ家の血筋と関連づけられている。

また、ハーディの小説においてはしばしば、喜びを追求しようとする個人の自然の本能と共同体の利害との間に軋轢が生じるが、『ダーバヴィル家のテス』も『日陰者ジュード』も、自由な幸福追求への衝動と自然に基礎をもたない社会的通念や制度との齟齬という問題が、濃厚に現れている。この問題に対するハーディの姿勢はアンビバレントである。個人に対して共感を表すとともに、共同体全体の利害にも理解を示している。しかしながら、両方の立場を考慮に入れることは、当然深刻な葛藤につながる、個人の気ままな生き方が共同体にとっては脅威に映り、ゆえに因習から逸脱して生きようとする人たちは、共同体から排除されてしまう。個人の幸福の追求が共同体の調和を乱すという、ハーディの物語ではおなじみの状況である。

『日陰者ジュード』においては、スーがジュードをリードする形で、通常の結婚制度に従わない同棲生活を送ることになる。しかし彼らの行動は社会の規範を犯すものであり、多くの場所で共同体のメンバーとして受け入れてはもらえない。結婚制度は、放っておけば奔放に流れてしまいがちなセクシュアリティを秩序化することに寄与している。制度としての結婚という形の結びつきから自由であらうとする彼らの愛の追求は、フィロットソンの友人のギリ

ガムが「人間がみんなそういうふうにしたら、一般的に家庭崩壊が起こるだろう。夫婦の所帯なんてものは、もう社会的単位にはならなくなるよ⁽³⁾。」と指摘しているように、社会規範に対する挑戦を意味する。

ジュードとスーは何度も住居や職からしめだされたあげく、結局スーが法律に基づいた結婚へと従うことによって、社会秩序は保たれる。こういったストーリーの流れは、個人の自由な生き方と、異分子を排除しようとする社会の制度との間で起きる軋轢という、ハーディ小説でよく出てくる展開とその帰結である。

このように、『ダーバヴィル家のテス』と『日陰者ジュード』は、ストーリー展開をはじめ様々な点において多くの特徴を共有しているのだが、二つの小説の最も基本的な相違点は、主人公の性が逆転していることである。しかしこの単純な逆転が、物語の雰囲気に決定的な影響を及ぼすことになる。この二つの小説のムードの違いを生み出している理由のひとつは、語り手の主人公への関わり方であるといえる。その点も留意しながら、次の章では『ダーバヴィル家のテス』と『日陰者ジュード』との相違について、詳しく見てみることにする。

2. 『ダーバヴィル家のテス』と『日陰者ジュード』の相違点

ジリアン・ピアによると、ハーディの小説のプロットはほとんど常に悲劇的であるが、その一方でハーディの多くの文章は読者に喜びに満ちた感覚を呼び起こす。『ダーバヴィル家のテス』の場合も、物語の悲劇性とは対照的に、喜びに満ちた描写が溢れている。しかし、大きな希望を喚起するシーンが多く出てくるのに、それらのシーンがつながっていった結果は悲劇へと終わってしまう。一言でいうと、物語の展開と描写とが矛盾しているのである。ジリアン・ピアは、ハーディの小説におけるプロットと描写の間に存在する矛盾を指摘しつつ、『ダーバ

ヴィル家のテス』と『日陰者ジュード』の根本的な違いについてコメントしている。

『ダーバヴィル家のテス』においては描写がプロットを圧倒しており、ジュードとスーの物語に比べて暗さを感じないのである。『ダーバヴィル家のテス』は悲惨ではあるが、同時に歓喜にも満ちている。運命の冷酷さと不当さが合わさったような『日陰者ジュード』のプロットは、描写を無効にしよう⁽⁴⁾。

確かに『日陰者ジュード』では、『ダーバヴィル家のテス』において顕著だった喜びに溢れた豊かな自然の描写が、すっかり少なくなってしまっている。『ダーバヴィル家のテス』のマーロットやトルボットヘイズの肥沃な自然は、『日陰者ジュード』のクライストミンスターやメルチェスターなどの都市的な風景に取って代わられている。舞台となる背景のみならず登場人物のレベルでとらえても、似たようなことがいえる。テスにおいては、本能に忠実であるというテスの生き方が自然の強烈な喜びの一部として肯定的に描かれ、彼女にしばしば訪れる不運にも関わらず生命の喜びで横溢している。それに対しジュードの場合は自然の本能は性的誘惑に負けることと深く関連づけられ、彼を学問のコースを歩む目標から引き離してしまうというネガティブな働きをしてしまう。

また、テスを待ち受ける厳しい運命にも関わらず、『ダーバヴィル家のテス』には希望を残すビジョンが含まれている。死の前にテスは自分を苦しめたアレクに復讐を果たしたあと、愛するエンジェルとの関係を成就し、最後はあたかもテスの悲劇を補うかのようにしてエンジェルとテスの妹のライザ・ルーが結びついて終る。『日陰者ジュード』においては、その死に際してジュードの願いが報われる要素も全くなく、孤独な死の惨めさだけが際立っている。

両方の小説とも、語り手は主人公への強い共感を表しているのだが、テスの描写の仕方は、ジュードの取り扱い方とは対照的なものである。テスについてはその優れている点が頻繁に強調される。村の学校で最も頭のいい女の子で、トールボットヘイズでは最も美しい女性であり、エンジェルの結婚相手と目されているマーシー・チャントより、見た目にも性格的にも優れていると示唆されている。テスの魅力を浮き彫りにしようとする描写は全編通じて執拗に現れている。ジュードについても、メルチャスターの学校の女の子たちがジュードを見たとき、「窓からジュードを眺めている女子学生たちは、あんな優しそうな顔をした若者にキスしてもらう喜びのためなら、罰を受けることも厭わないだろうと感じた⁽⁵⁾。」と描写されていることから分かるように、異性に対して十分魅力を持っている男性とされている。しかし語り手がより強調しているのは、ジュードの持つ欠点の方である。彼はまず、周囲の人にしばしば迷惑をかける少年として登場する。鳥を追い払うことができないために、トラウザムによって仕事を追われる。ジュードが日々の使い走りの仕事のために、本を読みながら馬車に乗っていると、村の人たちはその様子を見て「あんな方法は本人にとっては都合のよいものかもしれないが、同じ道を歩く他の者にはどうも迷惑だ⁽⁶⁾。」と、不満を吐く。大人になってからも、周囲に迷惑となる存在というジュードのイメージは変わらない。

エンジェルとスーの間の違いもまた、テスとジュードにおけるのと同様、語り手のそれぞれのキャラクターに対する態度に起因している。エンジェルとスーの間の最も基本的な相違は、そのキャラクターの理解しやすさである。エンジェルの性格の強みも弱みも知り抜いているかのように、語り手はときどきエンジェルの性格を分かりやすく要約している。エンジェルのキャラクターが読者に把握しやすい理由は、語

り手自身がエンジェルを容易にコントロールしているからである。語り手はエンジェルを因習の俘囚として設定することによって、物語を悲劇的な方向にもっていく。つまり、物語を展開させるための道具としてエンジェルを利用しているともいえる。それとは対照的にスーに対しては、語り手はその全知性を発揮することがなく、スーの性格の明確な説明を控えている。そしてこの物語のほとんどの男性が、語り手と同様に彼女の性格のとらえがたさに困惑している。

スーの性質の特異性は、彼女の男性との関係のとりむすび方において顕著に窺え、彼女は自分が異性に与える苦しみから大きな喜びを得ているようである。彼女はある大学生と一緒に暮らしながらも彼と性的関係をもつことを拒む。フィロトソンへの性的な嫌悪を隠そうともしない。ジュードに対しても結婚までいたる気はないと言って、彼をがっかりさせる。いずれのケースでも、男性の気持ちは大いに傷つけられるが、スーは常に自分流儀の生き方を押し通そうとする。彼女は意識的にせよ無意識的にせよ、多くの男性を惹きつけてはもてあそぶことになる。

スーの特異性のせいで、ジュードとスーの愛し合い方は、テスとエンジェルの愛し合い方とは異なった様相を呈しており、この二組のカップルの愛と幸福の追求の仕方にも興味深い相違が見られる。テスはエンジェルを愛することによって本能的に自然の喜びを追い求めている。そして二人は、愛する人と一緒にいたいという心からの欲望に従っている。ジュードとスーもまた、自発的な愛情を歪めてしまうことの多い因習的な結婚制度に挑戦し、結婚という契約によって規定される関係より、もっと自然の愛に忠実であろうとする。しかしスーのジュードに対する愛情は、彼女自身が告白するように、男性を自分に惹きつけたいという強い願望にも起因しているので、二人の追求しているものを自

然で自発的な愛であると定義できるかどうかは疑問である。ジュードがもらす「スー、君に悩まされるとき、僕はときどき、君は本当に人を愛することができないんじゃないかと思うことがあるんだ⁽⁷⁾。」という種類の悩みをテスは共有してない。むしろ『日陰者ジュード』では、ジュードとスーが結婚制度と自然の愛の齟齬について知的な議論をし合う場面の多さが目立ち、この点もテスとエンジェルの関係にはあまり見られない点である。

3. リトル・ファザー・タイムの存在

『ダーバヴィル家のテス』の生命力が横溢する雰囲気とかけ離れた『日陰者ジュード』におけるもう一つの陰鬱な要素は、物語の暗い基調を代表するようリトル・ファザー・タイムである。リトル・ファザー・タイムによる子供たちの殺害と自らの自殺はスーの神経を完全に参らせ、因習に対して反抗的な態度を取り続けてきた彼女も、この事件を機に態度を百八十度変えてしまう。彼女は自分が傲慢すぎたのだと認め、因習の側についてしまう。この出来事は決定的なターニングポイントになり、ここからスーは惨事に対する脆弱さを露わにしてしまう。

スーの突然の態度の変化を、彼女が因習の価値に気づいたためとは見なせないだろう。彼女の人生観の劇的な変化はむしろ、自然に対する見方の変化に基づいている。スーは次のように言っていて以前のものの見方を捨てている。

あたしたちこう言ったのを覚えていらして？ われわれは歓びを徳とするのだ、あたし言ったわ、自然があたしたちに与えてくれたどんな本能も — 文明があえて妨害してきた本能を — 楽しむことこそ自然の意図であり、自然の法であり。存在理由なのだ、と。なんと恐ろしいことを言ったことでしょう！ そしていま、自然をその言葉通りに受けとる

ほど馬鹿者だった罰として、運命があたしたちの背中を突き刺したのよ⁽⁸⁾！

彼女の以前の人生観は、自然は喜びに満ちた人生を送るように命じているということであった。子供の死という悲劇のあと、彼女はそのような前向きな人生観を捨ててしまい、自然の残酷さについて意識的になっていく。「子供たちの死が私にどうやって生きるべきか教えてくれたの⁽⁹⁾。」と、スーは悟ったように呟く。

これ以来、スーの人生や結婚に対する考え方が劇的に変わってしまい、彼女は因習や法に基づいた結婚に自分を委ねることになる。彼女の「自己放棄⁽¹⁰⁾」の選択は、社会の一員としての義務に目覚めたわけでも、因習に従うことと個人主義を貫き通すことのメリットをはかりにかけて行ったわけでもない。それは、ショッキングな経験を通して、自分が自然界の頼りない小さな生き物にすぎないことを悟った結果なのである。いわば世の中を見る際のスーのパースペクティブが広がったのである。このパースペクティブの拡大は、テスにも訪れている。物語の最後、エンジェルはさらにテスとの逃避行を続けたかったのだが、テスが古代の若者と同様自分が犠牲の生贄になったのだという認識を持ったこと、つまりより大きなパースペクティブで自分の人生をとらえたことが、社会に対する彼らの抵抗をストップさせたのだ。この展開は、ジュードの説得にも関わらず、スーの自己放棄の選択が彼らの社会への抵抗をストップさせたことと、類似している。

ハーディの小説では、パースペクティブの拡大によって自然の残酷の法則の認識へと到達する登場人物がよく出てくるが、そういうビジョンを持つのはたいてい、大きな不幸を経験した人たちや死が近づきつつある人たちである。しかし、リトル・ファザー・タイムは「少年の顔は、茫漠たる「時」の大海原を遠く遥かに見晴るかし、今見えているものには全く無頓着であ

るように見えた⁽¹¹⁾。」と書かれているように、最初から人生を大きなパースペクティブで捉える能力を有していた。そしてリトル・ファザー・タイムが初めて登場した場面では、彼の動きは波やそよ風や雲といった自然現象に例えられている。

子供は機械のように一様なゆっくりした歩き方になった。それは人間というよりもむしろ波や微風や雲の動きのようであった。・・・子供というのは細部から始めて、一般的なものを学んでいくものだ。身近なものから始めて、徐々に普遍的なものの理解へと進んでいくのが子供である。この少年は人生一般の原理から出発して、こまごましたことには関心をもたないように見えた⁽¹²⁾。

ここに出てくる「一般的なもの」や「普遍的なもの」といった言葉は何を意味するのか？その手がかりは、ジュードとスーがウエセックス大農業博覧会を訪れたときの場面に見つかる。博覧会を観回っているとき、ジュードとスーはバラの美しさを愛でるために立ち止まるが、リトル・ファザー・タイムの方は、そんなバラも数日たてば萎んでしまうのだという事実思いを馳せる。あらゆる美や喜びは、大きなパースペクティブから眺めた場合、はかないものである。この少年が見ているものは、今ここにある美やその瞬間に感じる喜びではなく、どんな美や喜びの追求も最終的には空しい結果に終わってしまうという普遍的な法則なのである。

このように、不幸な経験のあとや死の直前に大きなパースペクティブで世の中をとらえるようになるのではなく、生まれつき大きなパースペクティブを持っているキャラクターの出現ということが『日陰者ジュード』の特異性であり、このことも『ダーバヴィル家のテス』と異なる点の一つであるといえよう。

4. コーパスデータによる検証

前章までで『ダーバヴィル家のテス』と『日陰者ジュード』のいくつかの類似点と相違点を見てきた。この章では、客観的データを示すことによって、それらの相違についてより明証的に裏書きすることができるか検証してみることにする。

まず準備として、電子テキスト・アーカイブの「プロジェクト・ゲーテンベルク」より『ダーバヴィル家のテス』と『日陰者ジュード』のテキストデータをダウンロードし、小説の本文とは無関係な部分はカットしたうえで、二つの作品のコーパスデータを用意した。そして言語処理ツール Antcom を用いて、色々な語句の出現回数を調査することにより、ここまで見てきたトマス・ハーディの代表作『ダーバヴィル家のテス』と『日陰者ジュード』の特徴の違いを、客観的データとして示してみる。

まずそれぞれの作品の舞台背景に関連する語句として、例えば 'farm' と 'farmer' の出現回数を調べてみると、『ダーバヴィル家のテス』ではそれぞれ44回と49回であるのに対し、『日陰者ジュード』では2回と12回である。一方 'college' だと『ダーバヴィル家のテス』では6回、『日陰者ジュード』では43回と、数字が逆転する。これは、農村の牧歌的な雰囲気の色濃い『ダーバヴィル家のテス』と、大学町クライストミンスターバックグラウンドとしての比重が大きい『日陰者ジュード』の特徴が客観的データとしても示されているということである。

では次に、『日陰者ジュード』に比べて『ダーバヴィル家のテス』の方が、生の喜びに溢れた描写が多いという指摘については、どのような言葉の出現回数に反映されているだろうか。'happiness' は『ダーバヴィル家のテス』で22回出てくるが、『日陰者ジュード』では7回しか出てこない。一方 'unhappy' と 'unfortunate' を合わせた数は、『ダーバヴィル家のテス』で

は11回、『日陰者ジュード』では24回、ということ、割合の多さが逆転している。『日陰者ジュード』に比べて『ダーバヴィル家のテス』の方が主人公の幸福感の描写がかなり多いことが、データのうえでも裏付けられているということになる。

次に、両方の小説とも「結婚」の問題が大きな比重を占めているが、‘marriage’の出現回数を見てみると、『ダーバヴィル家のテス』では30回、『日陰者ジュード』では68回と、『日陰者ジュード』の方が倍以上も多くなっている。これは『日陰者ジュード』が結婚制度についてより意識的に取り扱っていることを表しているだろう。ジュードとスーが結婚制度について議論をしている場面が多いことの反映である。それに関連して‘freedom’の数を見てみると、『ダーバヴィル家のテス』の2回に対して、『日陰者ジュード』の方が12回と6倍も多く出現している。これは、結婚制度のみならず教会の制度、大学の制度の制約からの「自由」を求めるジュードとスーのカップルの試みが大きなモチーフになっていることを示しており、その点でも『ダーバヴィル家のテス』との違いが関連語彙の出現回数として表れている。

次に、主人公に訪れる不幸な運命についての原因として、両方の作品で共通してよく言及されているのが「血」であるが、「血筋」「血縁」といった意味合いで出てくる‘blood’の出現回数を調べてみると、『ダーバヴィル家のテス』では13回、『日陰者ジュード』で3回である。このことから、『ダーバヴィル家のテス』の方が、血縁についてより多く言及されていることが窺われる。さらに‘ancestor’について調べてみると、単数形、複数形合わせて『ダーバヴィル家のテス』では10回、『日陰者ジュード』で4回という出現回数であることから、『ダーバヴィル家のテス』の方が、主人公の運命と遠い祖先の行いと関連がより多く示唆されていることも分かる。

本稿では試行的に『ダーバヴィル家のテス』と『日陰者ジュード』の類似点や相違点が、関連語彙の出現回数にどのように反映しているか確認してきたが、今回はごく素朴な形の調査であり、ある意味で当然の結果が出たにすぎないのかもしれない。しかしそのことはまた、作品から受ける様々な印象や問題点の客観的裏付け資料として、コーパスデータが一定の有効性を持つことを示していることにもなるだろう。では、作品分析にコーパスを活用するためのいわば試運転的な段階を経て、今後コーパスデータの援用によりさらに有意義な研究につなげるためには、どのような切り口が考えられるか。

例えばハーディはダーウィニズムの影響を受けたとよく言われるが、パトリシア・インガムは『ダーバヴィル家のテス』になって初めて、ハーディは遺伝的形質というダーウィニ的な意味で、遺伝の問題をじっくりと探究することになる⁽¹³⁾。」と言っている。そうだとすると、『ダーバヴィル家のテス』以前の作品と以降の作品とでは、使用する語彙に変化がある可能性があるだろう。今回分析した中では、‘blood’が遺伝に関連する語彙であるが、他にも‘hereditary’‘inheritance’‘inherit’‘reproduction’‘generation’‘species’‘survive’など、進化論に関わる語彙の出現回数を、『ダーバヴィル家のテス』と『日陰者ジュード』だけではなく、ハーディの初期の小説から時系列的に並べて、その出現回数の変遷の様子を追っていくことによって、ダーウィニズムの言説や発想がどのようにハーディの用いるタームに影響を与えているかを調べることができるだろう。つまりハーディの小説を、コーパスを援用しながら分析することによって、科学、文学、そして神学など色々な分野が同一の言説の制度のうちに共存する部分が残り残っていた時代に、進化論的言説に文学はどのように絡んでいたのかという、より大きな問題へと切り込んでいく可能性が開けてくるのである。

注

- (1) 福岡忠雄 『虚構の田園 ハーディの小説』 あぼろん社 1995. 82-83.
- (2) Hardy, Thomas. *Jude the obscure*. New Wessex ed. London : Macmillan, 1975. 195.
- (3) Beer, Gillian. *Darwin's Plots : Evolutionary Narrative in Darwin, George Eliot and Nineteenth-Century Fiction*. 1985. 257-258.
- (4) Hardy, Thomas. *Tess of the D'Urbervilles*. New Wessex ed. London : Macmillan, 1975. 366
- (5) Hardy, *Jude* 116-117.
- (6) Hardy, *Jude* 23.
- (7) Hardy, *Jude* 202.
- (8) Hardy, *Jude* 288.
- (9) Hardy, *Jude* 309.
- (10) Hardy, *Jude* 293.
- (11) Hardy, *Jude* 233.
- (12) Hardy, *Jude* 234-235.
- (13) Ingham, Patricia. *Authors in context Thomas Hardy*. Oxford : Oxford UP, 2003. 169.

参考文献

- 安藤勝夫『なぜ「日陰者ジュード」を読むか』東京：英宝社1997
- Bayley, John. *An Essay on Hardy*. Cambridge : Cambridge UP, 1978.
- Beer, Gillian. *Darwin's Plots : Evolutionary Narrative in Darwin, George Eliot and Nineteenth-Century Fiction*. 1985.
- Goode, John. *Thomas Hardy : The Offensive Truth*. Oxford : Basil Blackwell, 1988
- Hardy, Thomas. *Tess of the D'Urbervilles*. New Wessex ed. London : Macmillan, 1975.
- Hardy, Thomas. *Jude the obscure*. New Wessex ed. London : Macmillan, 1975.
- 清宮倫子 『進化論の文学—ハーディとダーウィン』東京：南雲堂 200
- 福岡忠雄 『虚構の田園 ハーディの小説』 京都：あぼろん社 1995.
- Ingham, Patricia. *Authors in context Thomas Hardy*. Oxford : Oxford UP, 2003.
- Widdowson, Peter. *Tess of the D'Urbervilles (New Casebooks)*. London : Macmillan, 1993